

明治期以降、日本の美術は急激な西洋化の波にさらされます。日本の洋画家たちは、西洋画の写実表現や遠近法などを取り入れ、独自の表現を求めて模索を続けました。このような状況下で、国が主催する文展が創設されます。本県の洋画家では、西都市出身の塩月桃甫が、大正5（1916）年に文展入選を果たしました。また、都城市を代表する山田新一は、大正14（1925）年に文展を前身とする帝展に初入選し、中央画壇で活躍しました。一方、伝統的な日本画の世界においても、西洋画の要素や特徴を取り入れた新しい「日本画」への取り組みが進みました。本県を代表する日本画家として、文展で受賞を重ねるなど日本画界をリードした都城市出身の山内多門、同じく都城出身で、大正4（1915）年の文展において初入選で褒状を受けた益田玉城が挙げられます。

ここでは、これら宮崎県を代表する画家たちの作品を中心に紹介するとともに、郷土作家や本県ゆかりの作家が異国の情景を描いた作品を紹介します。画家たちが異国に向けたまなざしを感じながらお楽しみください。

■展示作品リスト

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	大きさ(cm)	技法
1	益田 玉城	1881～1955	青嶋	不明	122.9×40.8	日本画
2	山内 多門	1878～1932	秋山帰樵	1923（大正12）	141.0×50.0	日本画
3	渡辺 謙二郎	1900～1943	山園	不明	31.8×40.8	油彩
4	渡辺 謙二郎	1900～1943	岡の家	不明	31.9×40.9	油彩
	渡辺 小五郎	1911～1941	やすんだ女（資料）	原型：1940（昭和15）	33.4×52.4×21.6	彫刻（ casting ）
5	塩月 桃甫	1886～1954	猫	1946（昭和21）	24.2×33.3	油彩
6	塩月 桃甫	1886～1954	柿と栗のある静物	1948（昭和23）	45.5×37.8	油彩
7	川辺 忠光	1935～2024	赤い柿の実B	1964（昭和39）	54.5×78.2	水彩
8	辻野 精一	1920～2000	人間模様	1981（昭和56）	145.4×194.0	油彩
9	河辺 一周	1941～2025	ルレーブの花は女を飾った	1993（平成5）	45.5×64.1	シルクスクリーン
10	山田 新一	1899～1991	冬のパルクモンスリー	1928（昭和3）	38.0×45.5	油彩
11	山田 新一	1899～1991	フィレンツェの丘	1964（昭和39）	65.1×50.0	油彩
12	山田 新一	1899～1991	ブルクセルにて	1970（昭和45）	37.8×45.4	油彩
13	山田 新一	1899～1991	雪のグルンデルワルド	1972（昭和47）	60.8×72.7	油彩
14	小野 彦三郎	1912～1971	カーニュ	1955（昭和30）	54.5×46.0	油彩
15	柏原 覚太郎	1901～1977	トレド風景	不明	38.2×45.6	油彩
16	白石 俊雄	1926～	運河の家並（アマアン）	1981（昭和56）	112.0×162.1	油彩
17	鱸 利彦	1894～1993	巴里の屋根	1930（昭和5）	60.5×72.8	油彩
18	村山 俊夫	1925～2013	ブルターニュの海辺	1980（昭和55）	130.7×162.5	油彩
19	はしぐち みよこ	1929～	望郷	1971（昭和46）	101.2×151.2	油彩
20	野口 徳次	1908～1999	バーミアンの石仏	1979（昭和54）	117.0×91.1	油彩
21	塩月 桃甫	1886～1954	ロボを吹く少女	1924（大正13）	60.6×45.0	油彩
22	山内 多門	1878～1932	天童寺 伽藍	1922（大正11）	60.0×178.8	日本画